

「保健医療科学」
第62巻 第3号 予告

特集：大規模災害に備えた保健医療福祉の連携体制の構築—東日本大震災後の公衆衛生活動をふまえて—

大規模災害において想定される保健医療福祉の課題
感染症の観点から (仮題)…………… 押谷仁
慢性期医療の観点から (仮題)…………… 石井正
大規模災害における「広域 (都道府県)」の支援体制
災害保健医療支援について (仮題)…………… 上原鳴夫
県外からの派遣支援の実態と今後の公衆衛生支援のあり方について (仮題)…………… 坂元昇
大災害時に備えた都道府県業務行政のあり方について (仮題)…………… 氏家國夫
大災害時における市町村保健師の公衆衛生看護活動について (仮題)…………… 宮崎美砂子
大規模災害時の保健医療福祉の連携体制と保健所の役割
ユニバーサルおよび地域に特有の体制整備のあり方について (仮題)…………… 佐々木隆一郎

編 集 後 記

現存被ばく状況の「現存」の原語はExistingだそうである。現に存在してしまった、起こってしまったことに耐えて共存すべき状況というニュアンスを感じる。放射能によるリスクはどのくらい低ければ、十分なのか——東日本大震災からこの2年余りの間に日本中の原子力関係者、保健医療関係者、研究者、政府関係者、政治家、マスコミ、あらゆる年齢層の一般市民が何度も疑問に思ったに違いない。そして特に小さい子どもを持つお母さんの心配は、かつてないほど大きいものであったと思う。これまでの慎重に慎重を重ねた放射線管理から考えると余りにも違うレベルの事象が色々起こり、市民に説明する側にも、相当な困難があった。しかも未曾有の地震、津波の被害と停電、情報途絶の中で、特に現地の状況が本当に大変であったことが、今回の特集で改めて想起された。また、現在でも関係者の方々が大きなストレスを抱えながら生活を続けている。当時の事象に学び、何を優先すべきか、他に想定・準備する必要はないか、今のストレスを少しでも軽減する方策はないか、われわれはあらためて検討しつつ、支援を続けていかなければならぬと感じた。

(生活環境研究部 浅見真理)